

# C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

(財)日本イタリア京都会館は、4月1日より公益財団法人 日本イタリア会館 になりました。

## \*カルヴィーノとアーティチョーク⑭\*

堤 康徳

サッカーの世界にも流行語がある。最近よく耳にするのが、「適切な距離感」。選手どうしは離れすぎても近すぎても有効なパスの交換はできない。各選手は味方の選手との適切な距離を保つ必要がある。日本代表のザッケローニ監督も、*le giuste distanze* という言葉をしばしば口にする。

コンフェデレーションズカップ開幕戦で、日本は開催国ブラジルに惨敗した。個の力に差がありすぎると言ってしまうえばそれまでだが、相手のプレッシャーに苦しみ、中盤でボールがまったくキープできなかった。そして、日本の攻撃の鍵を握る香川と本田の連携もほとんど見られなかった。実際に、試合翌日に改善策を検討したという香川は、選手間の距離に問題があったことを認め、以下のようなコメントを残している。「敵陣に入っても、選手間の距離が遠くて効果的な連携が生まれなかった。互いが近づくように意識しなければ」(6月18日付朝日新聞朝刊)

次のイタリア戦では、敗れはしたものの、日本は攻撃の面で随所にいいプレーを見せた。中盤での相手のプレッシャーがさほど厳しくなく、比較的に自由にボールのキープができた点大きい。「適切な距離を保った」香川と本田の連携も改善されていたようだ。最後は、守備で致命的なミスを繰り返す日本と、一瞬のスキを見逃さない老獪なイタリア (*gli azzurri*) との差が勝敗を分けてしまったが……。ザッケローニ監督は試合直後のインタビューで、1970年のメキシコ・ワールドカップ準決勝のイタリア対ドイツの試合(イタリアが延長の末

4-3で勝利)を思い出したとまっさきに語っていた。どちらも手に汗握るシーソーゲームで、スコアも同じだったからだ。

適切な距離を保つことの必要性は、なにもサッカーにかぎらない。それは、私たちの生活全般における自己と他者の関係においても重要であろう。

2007年のイタリア映画に、*La giusta distanza* という作品があった(監督はカルロ・マッツァクラティ。日本でもイタリア映画祭2008において、『まなざしの長さをはかって』という邦題で上映された)。ポー川流域の小さな村に赴任してきたばかりの女性教師(ヴァレンティーナ・ロドヴィーニの憂いを含んだ官能的なまなざしに観る者は引きこまれる!)と、彼女に恋する実直なチュニジア人移民、そして、ふたりを近くから見守る新聞記者志望の若者が主な登場人物である。ベテラン記者が若者に取材の原則を教えるシーンがある。対象との「適切な距離」が重要であり、感情におぼれれば窮地に陥る、と。映画の題名はこの場面にちなむ。若者はしかしこの原則にそむき、女性教師の私生活をのぞき見るのであるが……。

カルヴィーノのいくつかの作品には、距離への強いこだわりが見られる。カルヴィーノのそのような傾向を、ドイツ文学者で批評家のチェーザレ・カーゼス(Cesare Cases, 1920-2005)は、ニーチェの用語を借りて「距離のパトス」と評した。

ニーチェの思想において、距離のパス(Das Pathos der Distanz)とは、支配者、あるいは強者や高貴な者が、その対極にある者たちとの隔たりを、あくまでも維持しようとする感情を意味する。したがってそれは、平等への意志や隣人愛とは対極にある。ニーチェは、『偶像の黄昏』のなかで、距離のパスを「人間と人間との、身分と身分とのあいだの裂け目、類型の多様性、自己であり自己を際立たせようとする意志」(『偶像の黄昏・反キリスト者』原祐訳、ちくま学芸文庫、2013、p. 126)と定義したうえで、それがルネサンスのように強い時代に固有のものだと述べている。さらに、両極端のあいだの緊張感は今日では失われ、ドイツ帝国もその例外ではない、と。

カルヴィーノの作品のなかに、カーゼスの言うような距離のパスはどの程度認められるだろうか？カーゼスがこの言葉を用いたのは、『木のぼり男爵』についての1958年の論考「カルヴィーノと『距離のパス』」においてであった。カーゼスは、主人公のコジモが、樹上生活者となることによって、「健全ではあるがやや悪臭を放つ民衆からもおもしろみがなくて冷酷な貴族の一家からも煩わされることなく、人々と関係をもち、彼らの役に立つことのできる距離」が与えられたと述べている。カーゼスは、カルヴィーノの距離のパスを長篇第一作『くもの巣の小道』(1947年)にすでに見出して、この論考を次のように始めている。

周知のように、カルヴィーノは、ニーチェが「距離のパス」と呼んだものを好んでいた。『くもの巣の小道』は、「近くから見るとやつらもまた気もちの悪い生き物だ」という虫にかんするピンの発言で終わる。これにたいし、クジーノはこう答える。「たしかに、だけどこうして見ていれば、きれいだ」。この距離のパスが、優越心のあらわれであるとしたら、それは不幸の原因でもある。それは、ありのままの現実にたいする適応能力のなさのあらわれなのだ。ピンにとっては、その汚れた生き物が、彼の姉、路地裏のネーラのような女たちと等しいために受け入れられない。あるいは、短編「マントンの前衛隊員」の語り手は、仲間のほか騒ぎに順応できない。距離における孤独と、必要ではあるが、不快なまでに近く不実な共同体との、このような緊張のなかに、カルヴィーノの作品世

界は存在している(Casare Cases, *Calvino e il «pathos della distanza»*, in «Città aperta», Roma, II(1958), n. 7-8, in Id., *Patrie lettere*, Torino, Einaudi, 1987, p. 160)。

CESARE CASES  
PATRIE LETTERE



EINAUDI

【Patrie Lettere 表紙の Cesare Cases 氏】

小説『くもの巣の小道』*Il sentiero dei nidi di ragno* は、作者自身のパルチザン体験から生まれた小説である。チェーザレ・パヴェーゼは、この小説の語り口を的確にとらえ、次のように評した。

ペンのリス、イタロ・カルヴィーノの巧妙さは、木によじ登って、恐れよりも遊び心から、騒々しく多彩な、「他とは異なる」ひとつの森の寓話として、パルチザンの生活を観察したことである(Casare Pavese, *Il sentiero dei nidi di ragno*, in «l'Unità», 26 ottobre 1947, in Id., *Saggi letterari*, Torino, Einaudi, 1968, p. 245)。

ここで注目すべきは、カルヴィーノの観察眼が地上ではなく、地上から数メートルの距離の樹上にあることを、パヴェーゼが見抜いていた点であろう。樹上に確保されたカルヴィーノの視線は、天上からすべてを見渡す超越者の視点とはもちろ

異なる。カーゼスは、このパヴェーゼの指摘をひとつの参照点として自らの論考を執筆しているのである。

主人公の少年ピンは、娼婦の姉のもとに通うドイツ兵からピストルを盗んでそれをくもの巣のなかに隠す。ピンは捕えられるが、獄中で知り合ったパルチザン、ルーポ・ロツソとともに脱走する。ピンがひとり森をさまよっていると、大男のパルチザン、クジーノと出会う。ピンが、クジーノに連れられて行った山小屋は、落ちこぼれの寄せ集めのようなパルチザン部隊の拠点だった。こうしてピンは彼らと森で生活をともにすることになる。小説をしめくくる蛍をめぐるとの会話は、ピンと、彼が親友(Grande Amico)と呼ぶクジーノのあいだで交わされている。蛍を意味する *luciola* には売春婦という意味もある。この場面でのクジーノは、ピンの姉ネーラを、弟がドイツ兵から盗んだピストルで殺してきたばかりであることが暗示されている。クジーノはなぜ、ネーラを殺したのか？ 彼女がドイツ軍と通じていたからとも、女嫌いのクジーノが少年ピンに思いを寄せていたからとも考えられる。

このように、じつはこの小説には、「森の寓話 (una favola di bosco)」から逸脱するような、性と死をめぐるとの生々しいエピソードも盛り込まれているのである。

「マントンの前衛隊」*Gli avanguardisti a Mentone* は 1953 年に執筆されたカルヴィーノの短篇で、1954 年の短篇集『参戦』*L'entrata in guerra* に他の 2 篇とともに収められた。これらの 3 篇は、1958 年以前の全短篇を収録した『短篇集』(*I racconti*, 1958) においては、「困難な記憶」と題された第二部を構成する。

1940 年 9 月にイタリアとの国境に近い南仏のマントンを訪れた前衛隊員(ファシズム時代の少年組織。14 歳から 17 歳までの少年で構成される)の体験が一人称で語られる。前衛隊員たちは、6 月 10 日のフランスへの戦線布告とともにイタリア軍が占領したマントン(イタリアではメントーネと呼ばれる)まで、スペインのファランヘ党員を出迎えに行くが、その到着が一日遅れたために、略奪された町の探検を夜通し行い、子供じみた戦利品さがしに興ずるのである。ところが、語り手の「私」は、そのようなゲームにどこか違和感を抱き、仲間の輪に加わることができないのだ。

現実との適切な距離を幸運にも発見した『木のぼり男爵』の主人公コジモは、木からいつでも下りられるのにそうはしなかった。その距離をけっして手放すまいとする強い意志に、カーゼスは、距離のパトスと呼びうるものを見出した。たとえそのパトスに、ニーチェ特有の貴族主義的思考はさほど認められないにしても。一方、『くもの巣の小道』と「マントンの前衛隊」の主人公の場合はどうであろうか。彼らもまた、「不快なまでに近く不実な」共同体内部において、確たる居場所のない浮いた存在である。しかし、コジモとちがいは、いまだに他者との適切な距離を測りかねているのだ。



【L'entrata in guerra 表紙】

[参考サイト]

<http://www.einaudi.it/libri/libro/cesare-cases/patrie-lettere/978880659401>

<http://www.ebay.it/itm/LENTRATA-IN-GUERRA-ITALO-CALVINO-ED-EINAUDI-/260844159856>

(翻訳家、慶應義塾大学講師)

## イタリアそろばんの旅⑩

### \* 小学校の先生です \*

木下 和真

今日の授業は lezione 3. 前回は5になる数の組み合わせだったが、今度は10を使う。やはり導入はバレーボールとした。

「前の授業で1を足すには二つのテクニックがあることを説明しました。バーゲルの la tecnica bassa と パツレツジョの la tecnica alta でしたね。実はもう一つ1を足すためテクニックがあります。今日はそれを勉強します」

今までの復習を簡単に済ませ質問する。

「もう一つのテクニックは、バーゲルもパツレツジョも使えないときに使います。ボールが遠くて、どちらのテクニックも使えないときはどうしましょう？」

ボールに見立てた黒板消しを遠くにやり、どんなに手を伸ばしても届かない状況を作る。生徒たちは隣同士顔を見合わせている。

「スキアッチャータ！ (schiacciata)」

一人の生徒が答えた。スキアッチャータとはイタリア語でスパイクのこと。レシーブ、トスとくればスパイクとくるのは自然な発想だ。しかし、答えはNo。私は話を続ける。

「バレーボールは一人でする競技ではありません。友達がいいますよね」

必死に伸ばした手の横から、友達すつとが現れ、何事もなかったようにボールを返す振りをする。

「これが、3つ目のテクニック la tecnica con l' amico (友達とのテクニック) です」

説明はここからそろばんに戻る。

「そろばんの世界では1から9まで数字それぞれに友達がいるのです。では1の友達は何でしょう？」

3、4、6、生徒から様々な答えが返ってくる。そして、一人が9と答えた。

「そう、1の友達は9です。では、2の友達は？」

「勘のいい子はすでに気づいている。傍で聞いていた先生もうなずいている。」

「2の友達は8です」

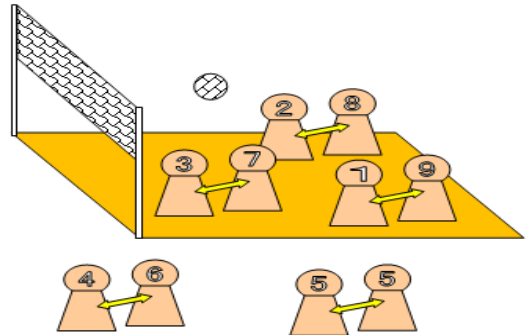
クラスの三分の一程の生徒は、わかった！ としたり顔だ。

l' amico del 3 è il 7 (3の友達は7)

l' amico del 4 è il 6 (4の友達は6)

l' amico del 5 è il 5 (5の友達は5)

次々とあげていくと、生徒全員が関係に気が付いたようだ。分かった時の子どもたちの顔は輝いている。それもそのはず、10になる数の組み合わせは、イタリアでは i numeri complementare (補数) と呼ばれ、小学校低学年でみっちり教えるそうだった。



この組み合わせが理解できたのなら、あとは早い。「友達の数を払い、10に繰り上がる」という操作をすればいい。

例えば9+4。まず、一珠はすべて使われているので、一珠を使って足すテクニカ・バッサは使えない。なら、テクニカ・アルタを考えるが五珠も既に使用しているのでだめ。となると、友達の助けを借りるしかない。4の友達は6。「友達の6を引いて、10を足す」とすると答えは13となる。

このテクニックが使えると、どんな数にでも1を足すことができる。0から3の数に1を足すには「la tecnica bassa」そのまま1を上げればいい。4に1を足すには五珠を使う「la tecnica alta」5をいれて

イタリア発月刊日本語新聞

**COMEVA**  
Pubblicazione mensile distribuita in Italia e in Giappone

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC  
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy  
Tel. & Fax : (06) 4743. 212  
E-mail : comeva@nipponclub.it  
URL : www.nipponclub.it

4を取ればいい。5から8は「la tecnica bassa」で問題ない。最後の9+1が「la tecnica con l'amico」となる。1の友達9を取って10に繰り上がればいい。

このように1を足すときは、状況に合わせて三つのテクニックから一つを選び、珠を動かせばいい。この判断を一瞬で行い、珠を動かせるようになることが、そろばんが上手くなるというわけだ。

lezione 3が終わり、1から5までの数はどのような状況でも足すことができるころまでできた。残りは6から9を足す最後の方法だけとなった。

ヴェローナでのそろばん授業もあとわずか、今日は lezione 4だ。

「今日は最後のテクニックを教えますね。その名も l'ultima tecnica(最終テクニック)です。」

イタリア語での授業にも慣れ、いつものように始める。

「では、5+9を考えてみましょう。そのまま足すことも、友達の1を取ることもできません。こんなときこそは l'ultima tecnica です。」

そろばん授業もいよいよ大詰めだ。

「最後のテクニックは、もちろん schiacciata(スパイク)です」

l'ultima tecnica というだけあって、今までのテクニックをすべて組み合わせる。

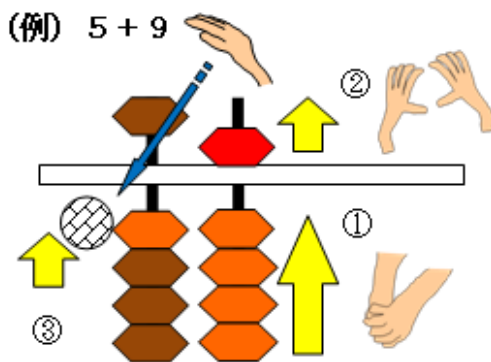
「スパイクを打つためには、まずはレシーブをしますね。そのボールをセッターがトス。アタッカーが相手コートにスパイクを打ち込みます」

この流れをソロバンに当てはめるとこのようになる。

そろばんの9は「5と4」で表した。この5と4を別々に足していく。まずは4。一珠で4を上げる。これはレシーブにあたる la tecnica bassa。そして、残りの5をたす。5は、5を払って10に繰り上がればいい。五珠を上げるので、これをトスとする。最後の繰り上がりりがスパイク。隣の位に1をドンと打ち込む。これで5+9=14ができた。

他も考えてみよう。例題は7+6。6を「5と1」と考え、まずはレシーブ。そろばんの下の部分に1を入れる。残りの5は、トスで五珠を上にあげ、隣の位に1をドンと入れる。答えは13となる。7も足してみよう。例えば7+7。7を「5と2」ととらえ、レシーブで2を入れる。トスで五珠を上にあげ、スパ

イクで10に繰り上がる。14だ。



この流れを伝えると生徒たちは bagher、palleggio、schiacciata とつぶやきながらそろばんを動かしていた。特に「schiacciata」とうれしそうに10に繰り上がる姿が印象的だった。

この日の授業を終え、一桁のたし算に関してはすべてを指導したことになる。今回のイタリアでの課題は一通り終了だ。

帰国の日も近づきコラードさんがレストランに招待してくれた。「イタリアにイタリア料理はない。あるのは各地方の郷土料理だ」といわれるように、ヴェネト料理のレストランだった。

食前酒のワインを飲み、プリモピアットに Capellini in brodo(カペツリーニ・イン・ブロード)を注文する。これは私の大好物だ。コンソメスープにそうめんのように細いパスタ。パルメザンチーズをかけていただく。チーズがなければこれがイタリア料理かと疑いたくなるくらいのおっさり味だ。セコンドはヴェローナ名物ロバ肉の煮込み。コラードさんにとっては懐かしの味だそうだ。おばあさんの得意料理で幼いころ冬によく食べたという。お客さんが来るときは前の日から一日中煮込んで、肉を柔らかくするのだそうだ。

食事の途中、コラードさんは私に聞いた。「あのバレーボールの話はいつ考えたのですか？」

「ほとんどイタリアです」

私は答える。

「あの話とはとてもよかった」

コラードさんから、直接褒めてもらえるとはやはりうれしい。

「あなたは本当に小学生の先生です。大学の先

生の私には思いもつきません。私なら一時間で  
かけ算までいってしまう」

コラードさんは笑顔で続ける。

「もちろん大学がよくて、小学校が劣るというわけ  
ではありません。

あなたは本当に小学生の先生です」

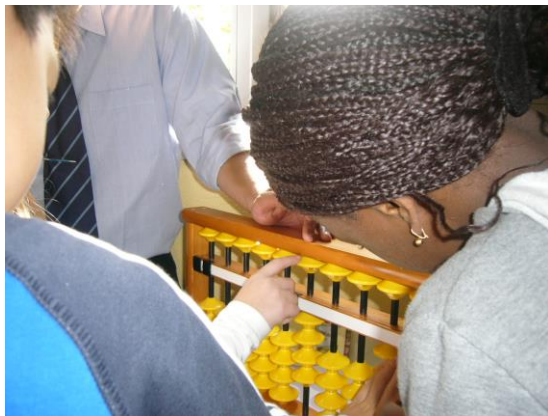
実際、私は小学生の先生だ。大学卒業後ずっと  
小学生に算数やそろばんを教えてきた。大学の  
数学など私の頭脳では到底及びもしない。私にと  
って、学会で世界を飛び回る研究者は憧れの存在  
でもある。コラードさんはまさにその一人だ。

それに比べると、自分はなんとちっぽけなのだ  
ろうか……

そんな思いが私の心をかすめる。

けれど、私は私でしかない。はるばるイタリア  
まで来ているのだ。自分にできることをするしか  
ない。

デザートの特ラミスを口に運ぶと、すでにレス  
トランはヴェローナ人でいっぱいになっていた。外  
はもう真っ暗。私のイタリア滞在も残すところあと  
わずかになっていた。



【そろばんをさわる生徒たち】

(当館語学受講生)



編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館  
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4  
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357  
E-mail: centro@italiakaikan.jp  
URL: <http://italiakaikan.jp/>

## イタリアンレストラン紹介

～大阪・北浜～

### イタリア料理 スカーラ

イタリア料理の魅力「マンマの味」を  
大切にする大阪の老舗レストラン。  
ピアノ演奏やカンツォーネと共に、イタリアの  
雰囲気をご存分に味わって下さい。

特典(日本イタリア会館会員証をお持ちの方)

ランチ: デザートサービス

ディナー: ワンドリンクサービス

住所: 大阪市中央区北浜 1-1-30

北浜リバービュー-B1

電話: 06-6222-0034

